

III 日本語教育と私

LOVE & HEART — WALK THIS WAY

チョン キョンヒョ
鄭 京姫

■ 1. 動機

日本語教師になりたくなかった、私は。

大学2年の夏休みの時に専攻が日本語であったということもあり、アルバイトで日本語学院の初級クラスを教えた経験がある。マニュアルがありその通りに教えていれば楽で、「朝飯前」と言われたのがきっかけで始めたのである。しかし、この2ヶ月間のアルバイトは私の「教師」というものに対する考え方を変えてしまったのである。お金を得る為に単に教科書を覚え、これを教えるのはまるで、嘘をついているのと同じ様で、自分が恥ずかしくなってしまったのである。

「もう、二度と人に何かを教えたくない。もう、後ろめたいことをするのは嫌。」

私は日本語教師になりたくなくなってしまう。いや、教育というものの自体が、自分とは無縁の遠い存在にすぎなくなってしまった。日本語を大学で専攻して、当たり前のように日本語学院の教師をしたり、日本で3ヶ月間の教師養成課程を受けて、教師になっていく同期達が、私にはマニュアルだけの嘘つき人間のようにみえた。

日本に来てまもなく私は、日本人とコミュニケーションをしたり、交流を持つ様になった。しかし、何かがすっきりしなく、私の心と頭は何かにつ引っ張られているような気がした。そしてその「何か」は、同じ韓国から来た留学生との話で気づくことができたのだ。「日本人は～だよな」。私たちは日本と日本人に関して何でも知っている

ように、淡々と語っていたのだ。私たちはどうして「日本・日本人フリー」的な考えになれずに、縛られているのか。どこが日本人で、何が韓国人なのか。今、私と話しているのは日本人でも何人でもなく「私」と「あなた」だけなのに。国にいた時は認識もしていなかったのだが、何故、私は今、それにひっかかっているのか。それは、日本に来て、私が出会えたかけがえのない人々のおかげなのだ。家族のように気楽で、一緒に悩んだり、笑ったり、泣いたり、心が温かい人々。私は自分が日本で生活している韓国人であることを認識することがなくなった。自分と相手との素直で充実した関係は、私が日本語の勉強を頑張らなくても自然と日本語を上達させていき、同時に、ステレオタイプの考えもなくなっていく気がした。確かに口にはしなくなった。

こんな思いに気づいた瞬間、韓国で受けてきた日本語教育を思い出した。日本人に会って話したこともないのに、日本人はタテマエと本音を言うのと堂々と教える教育とそれをそのまま情報として受け入れてしまう学習者がいる現場。私にはいったい何ができるのか。

現在、私は日本語教師になりたいと思っている。「二度と人に何かを教えたくない」と決心したあの時の何故かを見つけたからだ。それはきっと「心が通じない教育」であったのかもしれない。一方的な、マニュアルだけで教えるのは、学習者に愛も心も通じるわけがない。私はそう思うようになった。個人の大切さを知り、それが日本語教育に繋がり、ステレオタイプもなくなっていく教育、私はそんな教育がしたい。まだはっきりとはわからないけど、きっと出来そう。

私にとって日本語教育は、私と相手が分かち合い、心と心が通い合う教育である。

■ 2. 対話 — 2004年8月14日

GUEST：早稲田大学大学院 日本語教育研究科

たかはし 高橋, すえなが 末長, テルミ サンドラ, 輝美 (吉岡研究室 6期生)
リュウ・チャイー (宮崎研究室 7期生)

2.1. 先生の人影も踏まない。

姫：テルミはあさってからブラジルへ帰るし、チャイーは仕事と結婚式の準備などで忙しいのに今日は姫のために二人とも時間をつくってくれてありがとう。

チャイー：何を言っているの。当たり前でしょう。今日は3人でゆっくり会えてよかったね。じゃ、どこから話しましょうか。

テルミ：3人とも日本語教育とどんな関係と考えを持っているのかと、あと姫の動機文に関して話を進めていこうか。

チャイー：そうだね。じゃ、まず、チャイーからね。(笑)聞きたいことがあるけど、テルミは最初から先生になりたかった？

テルミ：いや・・・いやというか。私は元々、日本語が話せたからということからかも。子供の時から話せたので、いや、話せるかということ、16歳の高校2年の時に先生にならないかと誘われたのが、きっかけだったのかな。最初は、先生のお手伝いで施設日本語学院に入ったけど。でも、入って他の先生を見習ってから先生になっていくはずだったけど、入ってすぐ、先生一人が辞めて、その後、教える人がいないということで、やらざるをえなくなったのね。最初は教え方もぜんぜん分からなくて。でも、仕方ないからめっちゃくちゃに教えていたけど。

チャイー：それだと教え方分からないよね。私も、教室場が初めだったのは子供共に英語を教えることだったの。一週間が見学期間で、後、3週間のトレーニングと最後は試験というコースで、いろんな先生方の授業をみながら、teaching styleを見習うことだったのね。でも、私も、急に一人の先生が首になって1週間で授業を頼まれてやったの。それが台湾での英語の先生で。初めての教師の仕事だったけど、すごく怖かったよ。

姫：チャイーは大学でも日本語を教えていたでしょう？

チャイー：うん、3年ぐらい。その経験でやっぱり先生になりたくなったのね。

姫：何で・・・

チャイー：何で？専攻が解剖というか・・・

テルミ：解剖？？？チャイー、そういう勉強したの。

チャイー：言わなかったっけ？一応ね、法医学。でも、それって、一日ラボラトリーの中にいるから、一人だし嫌だったのね、寂しくて。でも、初めて台湾で英語を教えていた時、人と触れ合いながらすごくうれしかったの。生きている気がして。

その後から思いっきり言語教育に夢見て、教育についてももっと勉強したいと思って。それで、日本にきたけど。

姫：二人ともすごいね。いきなり教えられた。なんか、教えるためのマニュアルなんかなかった？

テルミ：マニュアル？

チャイ：あのね。姫の動機文を読みながら思ったけど、マニュアルってどういうこと。ちょっと驚いたけど。

姫：姫が動機文に書いたように、大学生の時のアルバイトで始めて日本語の教師を経験したじゃん。韓国は、約10年ぐらい前は、今のように日本語がそんなにブームでもなく、ソウルのど真ん中じゃないとあまりちゃんとした日本語学院はなかったのね。だから、ちょっとでも日本語や日本に関係のある人が教えられたの。そのせいか、先生の不足や、教え方の一律性のためなのか、姫がいた学校はマニュアルのような本があって渡されたのね。一つは基礎3ヶ月だと、その3ヶ月間の間、一日に教える分量が決められてある本と、もう一つは教科書で、表紙は学習者と同じだけど、中身は説明が書いてあって、重要な単語やその単語と関連のある日本事情とか教えなきゃいけない言葉などが書いてあったの。その時、授業の前日は家で必死に覚えた記憶がある。そうすると教えることなんて「朝飯前」だと言われたし。

テルミ：だから、動機に自分に嘘をついているようだと書いたの。なんかマニュアルどおりにしなきゃ行けなかったから。

姫：マニュアルだけだったのか分からないけど、本当になんか、私を信じて見ている生徒達に嘘をついているようで、私に教わる人々を裏切っているような気がしたの。いつも授業後は、気分が落ち込んだり、トイレで泣いたりしたから。

チャイ：どうしてかな。なんか、あれじゃない。先生って何でも知っていて、ちゃんと教えなきゃいけないのに、自分は何にも知らなく覚えてたし。

姫：そうかも。そういえば子供の時はよくママになんか言われたら「先生がこう言ったんだから大丈夫だよ」と言ってたような気がする。幼かった時からよく「先生の人影も踏まない」と言われたのね。先生は尊敬すべきで、神様と同様、先生も「様」だど。その考えがあったのかな。

テルミ：ある意味、姫は教師そのものに対してのイメージが崩れたんじゃない。

姫：そうかもね。

チャイ：中国もあるの。そのような考え。チャイも、先生はそんな存在だと思っ
ていたから、いまは変わったけどね。

テルミ：変わった？

チャイ：私はね、今考えるといくつになっても先生と呼ばれたくないな。最初、
英語教えていた時も1年で英語の仕事辞めたのね。教育というのをよくわか
らなく、台湾の先生のマネをしたりして。でも、いつの間にか自分の心の中は疑
問が大きくなったのね。生徒である子供が楽しければこれでいいのかな。このよ
うに教えればそれだけでいいのかな、この先生なら真似してもいいのかな。でも、
これって教育と言えるのかなど。なんかいまの話で姫の気持ちわかるような気が
する。

テルミ：私もブラジルで子供に日本語を教えたから分かるような気がする。ブラジ
ルの日系人は家では日本語を使わないのね。だから学校へ行かせて日本語を学ば
せるの。

私がいた学校は子供と接するのがすごく楽しくてもっと先生としてちゃんと教
えたい。でも、自分の力に限界を感じたの。子供に対する教育はただ教えるだけ
がすべてではないから。一応大学は教育学部だったけど、教育に対していまいち
分からなく、これでいいのかな、と私も思っていて、それで、8年ぐらい前、半
年間日本に来て、日本語教師のための教師養成講座に入っているいろいろ教わったの
ね。なんか私の教育観はこの時に少し立てられた気がする。多分、自分なりでい
ろいろ日本語教育に関して考え始めたから。

チャイ：テルミもいろいろ教育に関して疑問を持っていたんだ。みんな同じだね。

あのね、私の恩師とも言える先生が言ったことだけど先生になる条件には3つ
あるといったのね。一番目は教えられる能力、つまり日本語だと実力じゃない。
次は教え方で3番目は人間味だと言ったのね。この人間味はすごく大事でこ
れを持ってない先生もけっこういると思うの。私はね、姫の教え方はまだ知らな
いけど姫は日本語能力と第一、人間味がすごくあるのに、どうして絶対先生にな
りたくない、誰かに何かを教えるのをしたくないと文書の最初に書いたのか驚
いたね。ある意味この最初の文は次の文とは何か独立してる感じがすごく
引っ掛ったの。

姫：姫をそんなに思ってくれたのは大変恐縮だけど、私はそんなに教師としての条
件を満たしていないと自分自身はわかっているよ。日本語なんていまだに勉強中

だし、これから日本語の先生になっても学び続けなきゃいけないと思っているし。

誰かに何かを教えたくないと言ったのは私も、色々疑問が沸いたからかもね。例えば、大学の時、時事日本語という授業があって、タイム誌の日本語版を教材にした授業があったのね。なんか面白そうですごく期待してその講義を取ったけど、本当にびっくりしたのが、先生は学生に一人一人読ませて、その後は読んだ人の発音がよくないと指摘したり、内容に関して先生がちょっと説明していつも授業は終わりだったの。その時、私はある意味ムカついたかも。なんかタイム誌を読んだ後、みんなでディスカッションをしたり話し合うのかとおもったの。だからタイム誌を教材にしたのかなと思ったけど、なんか単に気取っている感じがして、すごく嫌だったの。

教師はみんなこうなのかな。なんか期待しすぎだったのか分からないけど、教師そのものに対して自分の中では考えがぐちゃぐちゃだったかもしれない。それで、教師は嫌だと思っていたかもね。

文頭に私が教師になりたくなかったと書いた理由は多分、今までの自分の心の中の清算かも。こんな思いがあったけどいまは違う。今は教師になりたいと思っているし、韓国語も教えているから、今の自分の心の思いを強調したかったからかもしれないね。

私はどうして、絶対教師になりたくないとか決めていたんだろう。

マニュアルが問題だったのか、先生としての能力がない自分に悔しかっただろうか。

私は、多分、自分の頭の底にある先生というイメージをすごく膨らんで考えていたかもしれない。先生は私の据わっているところより高い講壇に立って、何でも知っていて、先生は学習者に何かをすべてちゃんと教えないといけないという考え方があったのかもしれない。私に教わる人々を裏切っているような気がすると思ったのはある意味プレッシャを感じていたのかも。だから自分自身がマニュアルな人間で、他の先生に対しても信用がなくなってしまったかもしれない。チャイーは先生と呼ばれたいと言った。多分彼女が私の気持ちを分かるような気がしたと言うのは、彼女なりの教師としての立場がまだ立ってなく他の先生方の真似をしたり、スタイルを見習ったりしたからかもしれない。それもある意味のマニュアルなのではないかな。マ

ニュアルは決して悪いとは思わない。自分なり教師としてきちんとした立場があれば。

2.2. そうよ、人はみんな一人一人違うから。

テルミ：姫， どうしていまは教師になりたいと思ったの。日本に来る前からそういう風に思いが変わったの。

姫：日本に来てからだね。複雑だけど，簡単に説明すると，日本に来ていろいろな人と出会えて，出会えたその一人一人の大切さを感じたから。でもこれだけで教師になりたいと思われるのかと思うかも知れないけど，私にはそうだったの。その中で，留学生，特に韓国からきた留学生と話をしながら，鳥肌が立つぐらいびっくりしたの。私も最初，自分も同じく日本と日本人に関していろいろなステレオタイプを持っていたのね。でも，だんだん自分自身が気づくようになったの。どうして私は勝手に決めて，考えをしているのだろう。日本人と韓国人と分けられることはただ国籍の違いだけであって，その人のすべてを日本人という箱に入れて考えをしている自分に気づき始めてから，悲しく感じたこともあって。私の周りの人々は日本人ではなく，私の親友であり，かけがえのない存在である事をやっとわかったの。でも，他の留学生はまだそのような考えに縛られているから。なんか，私ができることはないのかと思い始めてから，「日本語教師になろう」と思ったのね。

チャイー：分かる気がする。よく韓国の男の人達は言うよね。日本人嫌い，日本が嫌だと。ニュージーランドにいる韓国人も日本人が嫌だと文句ばかり言ったり，よく日本人と喧嘩してたよ。でもね，たまに思うけど，そう言いつつ，どうして，そんなに嫌な日本に来ているのかな，なんか不思議。

チャイーも学校で歴史の勉強するとき，日本が中国にどういうことをしたと習ったし，また父のお友達からは日本に来るとき，日本の男の人はみんなスケベだと言われてたもの。でも，自分の口ではあまり言わないね。日本人とか，日本とかは。あつ，でも，考えは密かに持っているかも。たま私の彼を見つめながら，「これが日本人なんだろうな」と思うときがあるから。

姫：そうだね。そんなに嫌な日本に何で来ているのかと言いたくなるよね。姫は，韓国から来た年上の男の人とよく口喧嘩になったことがあったの。いつかは彼が帰国するから送別会を開いてあげた時，彼は酔った勢いかいきなり，「帰国する

前に日本人誰でもいいから殴ってから帰りたい」と大声で言うから、「日本人が兄ちゃんになんか悪いことした」「なんで、そんなに嫌なくせに日本に来てるの？」と姫が言ったら、私に「親日派で売国やろうみたい」と怒鳴りながら、「敵を知るために来た」と馬鹿みたいなこと言った。彼を見ながら、いったいそんな恨みはどこから生まれてきて、どうしてそんなに心が曲がってるのかと悲しくなるほどだった。

つい最近日本と中国のサッカー競技の時のことが大きく報道されたじゃん、テレビの番組で。若い女性アナウンサーが興奮して日本の選手達の身の安全が心配で、中国がなんてことするのと感情的に言ってたけど、そのアナウンサーは多分どうして中国サポーターがそういうことをしたのか、その背景は知らなかったんだろうと思った。

テルミ：あの、実は私も知らなかったの。私はブラジルでそのような教育は受けてなかったから。日本の戦争など歴史の勉強はしたけど、日本がどこの国へ、何かをやったとかまでは聞いてなかったの。ある意味ブラジルの日系人は日本人とか日本に対して良いイメージしかないかも。

チャーイ：まあね、私の彼も良く知らないもん、そういう歴史の事とかね。姫が言っているその気持ちは分かるよ。一人一人が大切だという。私だって、スケベな日本の男と結婚するから（笑）。でも、ステレオタイプはすごく難しい。特に言語教育ではどんな感じなんだろう。うまく説明出来ないけど。ただ、そのようにステレオタイプに縛られている人は日本語がうまくないと思った。日本語学校の時、同じクラスに一人の韓国の男の人がいて日本人が大嫌いといつも言っていたけど、その人って日本語はできなかったね、あまり・・・。

姫：あのね、言語というのはコミュニケーションじゃん。日本語教育も英語教育も言語の教育はコミュニケーションがうまく出来ることが大切だと思うのね。姫が人と接しながらマインドも心も広がったのか、すごく日本語が面白くなって、早く言葉を覚えて友たちと話をしたいとか、私の心に思っていることを伝えたいとか、誰かでも話せるようにと思い頑張ったお陰なのか。なんか、自然に日本語がうまくなった気がするの。私はある意味、言語においてステレオタイプに気づいて「私」と「あなた」という考え方を持った瞬間、私のコミュニティは広がっていたに違いないと思い始めたのね。

姫が喧嘩したその男の人も、チャーイのクラスメイトだった人もあまり日本語

がうまくないと感じたのは、多分その人たちは日本語を使って人と話し合いをすることが出来なかったのではないかと思う。例えば、嫌な人とはあまり話をしたくないじゃない。関わりたくないから。でも、好きな感情があったり、なんか好感がある人には近づきたいと思わない。もしそれを日本語にしたら、日本人ではなく、その人だけを見た瞬間、日本語も一步一步足が早くなると思う。たまにさ、私の友たちが「〇〇ちゃんは日本人ぽくない」というけど、「日本人ぽい」ということはどういうことで、どうして「その〇〇ちゃんは違う」と思ったのか、私が聞くと「分からない」と言いながら、ついでに「〇〇ちゃんだから」と小さい声で言って来るとき、「そうよ、人はみんな一人一人違うからだよ」と言ってあげるけどね。ある意味私の友たちにとっては、ささやかだけど、その言葉が彼女なりの気づきだったのではないかと思ったのね。

姫が日本語教育の中で、ステレオタイプが問題と思って研究したいと思ったのは多分自分の目でこのようなことを見てきたし、私自身も経験したことであるからだと思うから。

チャイ：そうだね。チャイの韓国人のイメージは言ってしまうと思うけど、すごくうるさかったね、文句も多く。カフェなどで、たまりになってうるさく大きい声出している連中みると「あっ、韓国人だ」とすぐ分かる。でも、姫も韓国人じゃん。チャイの大親友じゃん。そんなこと考えたことないな。もし、姫が大きい声出しても「姫は今日、ご機嫌だな」と思うから。国籍感じない、だって、二人の会話に夢中にしかならないからさ。

テルミ：ステレオタイプはどこから生まれてくるかな。なんか、先生の役割は大きいと感じる。先生の責任は重大だね。

姫：そうかもね。高校の時、ドイツ語を習ったけど、その時のドイツ語の先生はドイツへ1ヶ月研修を行って来てたらしく、いつも授業の時、20分ぐらいはドイツのことを話してくれたのね。その内容はほとんど毎週同じだったけど。ドイツへ行くと裸じゃないと入れない公園があるとってた。面白いことが、今もドイツだとその裸の公園が一番頭に浮かぶの。でも、先生からだけがすべてではないしね。チャイもお父さんの友達から言われたこともあるし、マスコミもあるから。ただ、問題だと思うのは植え付けかな。教室で先生が「日本人は～そうよ」と、そのドイツ語の先生のように同じ事を繰り返して言ってしまうと、多分、学習者の頭には、ある種のステレオタイプが刻まれるかもね。私はドイツ行ったら、そ

の裸の公園へ行ってみたい。入れる自身はないけどね。

その韓国の男の人とは仲が良かったけど、たびたびの私の突っ込みで、喧嘩みたくなり、今はぜんぜん連絡も取っていない。でも、私は信じる。その人は私との喧嘩で私が嫌になったのではなく、私との話できっといままで考えてなかったことを改めて考えることができたのと。だから、恥かしいから連絡してくれないのではないかと。でも、悲しい気分になるのはどうしてなのか。私にきっと何かが出来るだろうと信じはいるけど。

2.3. 血が出てもいいから・・・熱く語ろう。

テルミ：面白いね。多分先生は何でも教えなくなったからかもね。でも、どこまで教えて、どこまでは教えないほうがいいのかなんて分からない。

チャーイ：英語を教えてた時かな。先生は授業で、戦争と政治は言わないことだと言われたのね。でもチャーイは教えてもいいと思った。一応教えて吸収するかどうかは学生の判断じゃない。

テルミ：今回の実践の授業でもこのような問題が出たのね。もし日本語を教えている戦争のことが出たらどうするのかと。私だったら、なんか聞かれたら言うしかないとも思ったけど。

姫：もし、学校でそんなこと触れなくても多分、学生はどこかで触れるから、チャーイとテルミと同じように姫も授業中で話し合ってもいいと思う。お互い話し合いながら考えればいい事であるし。文章表現の授業の時も、私たちはみんなアメリカとイラクの戦争に関して熱く語られたし。

この文章表現の時間は私たち3人が始めて出会えた授業でもある。その授業は毎週、みんなでいろいろな話題を話をし、その話し合ったことを感想なり、自己主張なりで宿題として文章でまとめる授業であった。

ある日、アメリカとイラクの戦争に対して話があった日、私は一人のベトナムからの学生を忘れられない。韓国の男の人がアメリカは正しいことをしたと言いながら、人間社会は弱肉強食だから仕方ないと言ったら、その学生は涙をこらえながら、「強

い人は弱い人を踏んでもいいですか、踏まれた人はいまも苦しんでいますよ、どこからそんな権利が与えられるのですか。」と言った。私すら胸が痛いほどジーンとした。しかし先生は何も言わずに学生たちの話を黙々と、一生懸命聞いていた。

その時思った。血が出てもいいだろう。痛くて、痛くて、血が出るほど痛くなって自分が思っていることを熱く語りながら、人の話を聞きながらきっとそのベトナムからの学生は自分なりにいろいろ考えることがきっとできたのだろう。

テルミ：あの、川上先生の授業とか細川先生の授業とかよくない。

チャイ：そうだ、細川先生の授業は学習者の側でうまく4機能がバランスできる授業だから。書いて、みんなで話し合っ、メーリングでも書いて、また直して、話し合っ。

テルミ：そうだね。読む・書く・聞く・話すがつべて出来るから。私はGBKをとりながらいろいろ考えさせられて。

チャイ：宮崎先生も自律学習のことを言っているよ。

自分達の研究科や実践の授業などの話でしばらく花が咲いた。

チャイ：私はね、学生から引き出したい、学生の力を尊重して。私からは決してなく。

私が先生と呼ばれたくないと思った理由は、いつまでもチャイは学習者の立場でいたいから。これはある意味チャイにとっての日本語教育かも。でもたまには壁を感じるの。この前、言われた話だけど、日本語教育センターの授業を受講してる学生が、はっきり教えなく、学習者に任せる先生は楽だねといった。お金払ってるのにと。多分、あの学生は先生にはっきりとした答えを求めてたかも。

姫：はっきりした答えはないと思うけど。例えば、日本語の授業を試験の為にしたとしても、その学生には満たさないに違いない。試験の為に一生懸命に覚えて、ある程度日本語が出来ても、話せなかったら、その時はその時で学生は学生なりで不満が生まれるだろうし、先生は何にもしてくれなかったと言うはずだから。どんな教育がいいのだろう。

なんか、悲しいね。そう思う学生がいるから。私はお互い話し合う授業がいいな。1+1=2だけではなく、1+1=2でも、3でもなれる教育・教室がしたい。考えは無敵大じゃない。チャイが言った、学習者から引き出せる教育、それは

本当に大事だと思うけど。

チャイ：まあね。学習者のニーズというところだろうからね。学習者のニーズに合わせるかどうかは教師の役割というか信念に関わるし。

2.4. 愛と心というのは。

チャイ：姫の動機文をみると、大体「私にとって日本語教育とは」だと日本語と教育などを思い出して書くじゃん。チャイだってそうだし。でも姫は先生になりたくなかったとかステレオタイプとか「愛」という姫の信念を語っているのを読んでどうしてかなと思ったけど、今日の話で分かるような気がした。

なんか、姫の授業はお互いに知り合っていけそう。みんなが仲良く。

テルミ：それが姫が言ってる「愛」なのかな。

姫：「愛」は姫の教育における「信念」だね。最初日本語の教師を経験してたときは、自分なりの立場がなかったと思う。

姫が言う愛というのは教師としての自分への愛でもあるし、学習者に対する愛でもある。また人間としての愛でもあり、私の生き方、そのものでもある。一人一人が違うと思うのも、その一人一人において愛があるから。教育とは無縁そうに聞こえるのか、なんか、抽象的な言い方に聞こえるかな。いや、ちょっとり感傷的に聞こえるかもしれないけど、教師になりたかったのはこれしかない。

テルミ：いいよ。姫の信念だから。教師としての信念は100人いたら100人は違うし。

チャイ：そうよ。チャイの信念は「先生ではないこと」だから。これこそ「なにそれ」と言われるかもよ。

姫：なんとなく、初めて日本語教師になりたいと思った時、私になにが出来るのかと思ったとき、いつも喧嘩をしたあの兄ちゃんのことを思い出す。たまに私はこのことを思うの。おそらくその人に対して愛情がなかったら私とは関係ないことで、ある意味、人がなにを考えているだろうが、日本人が嫌だというだろうが、他人事だと思っちゃえばいいことだったのに、私はそれができなかったの。

私が出来たことはこれからでも韓国においての教育でこのような問題を捉えないといけなかったの。

韓国で、有名な大学院で日本語教育を研究し、今は大学で講師を行いかたや、ソウルの有名な日本語学院のいわば、売れっ子講師でもある友達に「韓国での日本語教育の中でステレオタイプをどう思うのかと、日本語教育において一人一人は大切な存在だという考えをどう思う」のかなどを聞いたことがある。でも、その子はステレオタイプも私の言っていることも「心理学勉強したほうがいい」と何もなかったように一言で言った。でも、腹が立たなかった。多分、それは彼女なりの信念とは異なっていたかもしれないから。私には今、今ここで、私が問題としていることを研究していくしかないだろうから。

姫：心と心が通じ合う教育は話し合いが出来ること。学習者が自ら考えをして、教室の中で先生である私のことを気にしなくお互い発言ができることだよ。私は何で、あなたはこういう考えをし、何で、そのようなことを言うのかと、疑いたくも、聞いたくもない。私はひたすら聞いて、教室の学習者はお互い信頼を持って、血が出てもいいから、熱く語られることだがいいと思う。そのためには、私は学習者と目の高さを合わせて聞いてあげたい。気楽に話しができる舞台を開いてあげたい。このとき、姫が思っている愛はきっと伝わるだろうし、私も学習者の話で彼らの愛を感じられることが出来ると思う。これが心と心が通じる教育だと思った。

チャイ：でもね、具体的にといわれたら。

姫：それは、先輩にもコメント貰ったんだ。具体的にどういう教室がしたいのかと。正直に具体的に「〇〇は〇〇だ」といまいえないかも。なぜならば、いまここで、私が言えるのはこれだけかも。チャイが先言ってたように、私にとっての日本語教育というタイトルに姫は日本語に関しても、また、教育に関してもあまり触れることができなかつたのは、まだ、そのような具体的な授業の設計は立てられない。マニュアルどおりに授業を行って以来。これが今言える、私にとっての日本語教育のすべてだから。もし、ここで、具体的にこうですと立派に答えたら、それは私にとっての嘘にしかならないと思った。

テルミ：確かに、論文を書くときは具体的な何かを求められるから。でも、姫のような考え方を私は尊重するよ。これからだね。姫が考えている心と心が通じる教育はこれから姫が研究を進みながら、考えよう。

チャイ：これから、姫の愛と心の教育は夢にしとこう、一応ね。これから SETP BY STEP, 歩いていけばいいから。姫が歩いていく、夢に届くまでのカーナビのようにこの二つはずっと姫とともにいそう。

姫：なんか、ポエムばいね。ありがとうね。姫がその具体的な何かを見つけた時は、そのときはまた話し合おう。私たち3人で。

チャイ：血が出てもいいからね。(笑)

で、テルミにとっての日本語教育とは何？あつ、失礼しました。

教えてください、先輩・・・。

私たちの日本語教育に関する熱く^{かしま}あつ話話は、席を移し、お酒とともに日暮れを迎えて何時間も続いた。

■ 3. 結論

母が作る料理はなんでそんなにおいしいんだろう。

「ねえ、ママ、何の調味料を入れればこんなにおいしくなるの？教えて。」

「それは、愛情をたっぷり入れるからでしょう。」

いつもシンプルに答える母の態度はなかなか理解できなかった。一体どうということ？

私はからかわれたようで、口を出してすねたふりをした。

母はそんな私に言い始めた。

「料理は不思議だよ。同じ料理を同じ材料や調味料を入れても、どうしておいしいのもあれば、全然おいしくない料理があるのかな？それは作る人によって変わるからじゃない？作る人が食べてくれる人の事を考える時、塩の加減とか、材料を食べやすい大きさに切ったりするなど、あらゆるところに気を使う。これらは、その料理を作っている人の愛情によってだと思ったら、どう？それはただのレシピだけでは分からないことでしょう。今、何を入れるのかは基本的な材料で後は愛情だけだから。」

でも、はっきり分からなかった。その時は、母は料理研究科のくせに、醤油大さじ

2とか、塩がいくつとか、そういうことはあまり教えてくれない、絶対、秘伝の何かをこっそり入れているとしか思わなかった。なぜならば、いつも母の料理はおいしくて、私たち5人兄弟は、仲良く食べていたことを思い出す。

でも、今はなんとなく分かるような気がする。料理をしていた母はすごくうれしそうで、料理を作っている母の傍でうさく遊んでいた私たちに怒った事がないから。多分、愛する私たちの為に、楽しく、愛情を入れながら、料理を作っていたかもしれない。その時の母の心が今、やっと分かるような気がした。

私は日本語の教師としても、教育としてもまだまだ何にもわからない。ただ、ただ、いま、どうして自分が日本語教師になろうとしたのか、その信念と立場で私なりの日本語教育を語ることはできない。でも、以前のように後ろめたいとか、裏切っているという考えはしない。

たまた、人に言われる。大学院まで行ったら、目に見える教育、韓国に役に立つ研究をしたほうがいいのではないかと。韓国は今、若者が漢字をあまり使わないから、日本語の教育に問題が生じているとか、韓国人は「つくね」が「ちゅうくね」に、「フルーツ」が「フルーチュウ」になるなど、発音の面で苦しんでいるから、発音に関する研究がいいのではないかと。でも、私が教師になりたいと決心したきっかけはこれしかなかった。人は一人一人大切だという考えである。目に見える問題だけではなく、目には見えないが密かに隠れてある問題は日本語という教育にあるから。日本語を使って、コミュニティを広げていけたら、一人一人の学習者と、「私」と「あなた」という考えを広げていけたらと。

私にとっての日本語の教育は愛という信念をもとに、教師と学習者の心と心が通じることである。

「愛」と「心」がすべてを解決してくれるとは私も思わない。だって、すべての解決なんかはないから。でも、愛と心は私においてすべてであり、私のこれから作っていく、日本語教育で、なくてはならない調味料であるから。

■ 4. 終わりに一友へ

テルミとチャイーと姫は同じ年齢で、始めて早稲田で知り合い、いつもお互いを励まし合う仲良しだ。

3人とも違う国籍で、違う環境で日本語を勉強し、教師としての経験もしてきた。また日本語教育においても違う問題意識を持っていて、当然のように研究も違う。

しかし、何故か「違う」ということばを連発していても、少しも彼女たちと距離感を感じない。なぜならば、私たちは親友であり、これから世界に発信できる日本語教育を研究し、共に学んでいくからだ。もちろん、お互いにかけての存在として。

今回、私が3者対話を望んだ理由は、初めて3人でお互いの日本語教育に関して話せることが出来るからだだった。

仲良しとはいえ、お互い忙しい日々で、せっかく会えても、日常の話しかできなかった。また日本語の教育に関して、右も左もよく分からない私が安心して、何でも話せて信頼できると思ったのは親友であるチャイーとテルミであった。

私の大学院の受験の日、朝から電話をして「緊張しないで頑張るね」と、試験後は「どうだったの、今日は家帰ってゆっくり休みしてね」と励ましてくれたテルミ。筆記試験の準備で忙しかったある日、すべての過去問題の解説と予想問題までまとめたノートをうれしそうに渡してくれたチャイー。チャイーとはよく夜遅くまで、図書館で勉強をしていたのね。二人の烈々な声援に答えてこれからもお世話になりながら、学びながら研究を頑張っていきたい。

早稲田に入ってよかった。

その理由は、私が愛という信念と心と心が通じる日本語教育を实らせる研究が出来るところはここしかないから。また、星の数のようにたくさんの人々の中で、こんなに心から幸せだと感じさせてくれるテルミとチャイーという友達に出会えたから。

二人がいてくれて本当によかった。

ありがとう。